

フランスの文化活動の深淵・アニメーション

—「読書へのアニメーション」から考える—

脇 田 泰 子

1. アニメーションとは何か

「読書へのアニメーション」という表現は、日本の図書館・教育関係者の間で広く使われていて、さほど目新しいものではない。読書活動における読書指導方法の一つの意で、この指導法がスペインで誕生したとするのが通説である。2000年前後から知られるようになった¹⁾。というのも、1980年代初めにスペインで書かれた著書の翻訳本が1997年、日本で出版され²⁾、これを機縁に、アニメーションといえば、スペイン生まれの読書関連活動と周知されるに至ったからである³⁾。

しかし、「アニメーション」という概念は本来、スペインではなく、1960年代のフランスで生まれたものである。フランス語で「活性化」を意味するanimation（スペイン語でanimación）は、ラテン語で「魂」を意味するアニマ（anima）を語源とし、命を吹き込む、活気づける（仏animer）という動詞の派生語になっている。しかし、フランスで「社会文化（socioculturelle）」と冠されることも多いこのアニメーションは、日本で考えられている読書指導法という限定的なものではなく、その基底に教育よりもさらに広範な人間性と自己実現に関する捉え方を有する広義の概念である。社会文化アニメーションのあり方と、それがフランスからスペインに伝わっていく過程については、先行研究として増山均「スペインにおける〈社会文化アニメーション〉概念の研究」（2009）に詳し

く論じられている通りであり、これが正当な評価だと位置付けられる。言い換えると、社会の発展とともに人間的な生活を創造していくためには文化の力が欠かせないとする、第二次世界大戦後のフランスの文化政策重視の姿勢が、社会文化アニメーションを生み出したのである。人間的な生活の創造と発展がまずあってこそ、社会全体も成長できるという意味で、経済発展を遂げる産業社会においては、人間らしい暮らしが奪われてしまいかねないとする危機感の表れでもあるとも考えられる。

では、なぜ、フランス発であったのか。きっかけはアニメーション誕生のさらに30年前にさかのぼる。1934年、隣国ドイツでアドルフ・ヒトラー（Adolf Hitler, 1889-1945）が政権を掌握すると、フランスでは社会党、共産党、急進社会党などの左派勢力が反ファシズムを旗頭に結集し、人民戦線が生まれた。2年後の1936年、レオン・ブルム（Léon Blum 1872-1950）率いる人民戦線内閣が成立し、40時間労働と年2週間の有給休暇⁴⁾の制度が確立した。それとともに、余暇・スポーツ庁が設立され、労働者はこの時点で早くも余暇という権利を獲得したのであった。さらに、第二次世界大戦後の1946年には第四共和国憲法の前文で「国民国家は、子どもと大人に対して平等に、教育、職業訓練、文化に接する機会を保障する」として、フランスは全国民に対する文化へのアクセスを約束した（前文は現・第五共和国憲法にも引き継がれている）。国民一人一人は余暇の権利だけでなく、文化を享受する権利、つまり「文化権（droit

à la culture)」も保持するという考え方である。戦争で荒廃した当時の社会は、挙国一致で復興を目指さねばならず、そのために最も求められていたのが民主主義理念であった。にもかかわらず、実際の富と文化とは、戦禍を通じてますます首都パリとブルジョワ階級だけに集中してしまっていた。復興の第一歩として、フランスはこの状況を何としても民主主義的に脱却、解消する必要に迫られていたのである。

このような背景から、フランスはその後も、芸術・文化に対する国家の関与の大きい国として歩んでいくことになる。第五共和制下の1959年には文化事業省⁵⁾が設立された。『王道』、『人間の条件』などの著者でレジスタンスに加わった経験もあるアンドレ・マルロー (André Malraux, 1901-1976) を初代大臣に任命したのは、文化国家たるフランスの威光を世界中にアピールしようと考えていた、時の大統領シャルル・ド・ゴール (Charles André Joseph Pierre-Marie de Gaulle 1890-1970) であった。ここでも、マルローは裕福なブルジョワ階級だけではなく、広く庶民も参加できる文化活動の導入に重きを置いた。そのためには、政治と同様、首都パリに依然としてほぼ一極集中していた文化状況に関しても、地方分散を進めることが社会の活性化に欠かせないとし、その具体的実践のため、国内各地域圏に一館ずつ、演劇や音楽の演奏会などを行える「文化の家 (Maison de la Culture、文化センターの意)」が設立され、さらに国民の様々な余暇活動を組織化する、国の文化政策の推進主体として、アニメーションが導入されたのである。

2. アニメーションの実践例①読書

このアニメーションの活動プログラムの実施に当たる人をアニマトゥール (仏 animateur = アニメーション推進者の意) という。民衆教育およびアニ

メーション研究を専門とするフランスの社会学者、ジュヌヴィエーヴ・プジョル (Geneviève Poujol 1930-) は、「人々の自由時間に働きかける社会的労働者」と定義している⁶⁾。これを職業とする人たちのあり方は1960年代半ばから研究が始まり、社会文化アニメーションを進める専門職の育成も、彼らの働く場である文化施設の建設と合わせ、国家計画に沿って順次、進められてきた。1970年には「社会・教育・スポーツ・文化の活性化にあたる専門職員」が国から認められ、ボランティア以外のアニマトゥールの適性免許制度 (BAFA・後述) も創設されるに至った。

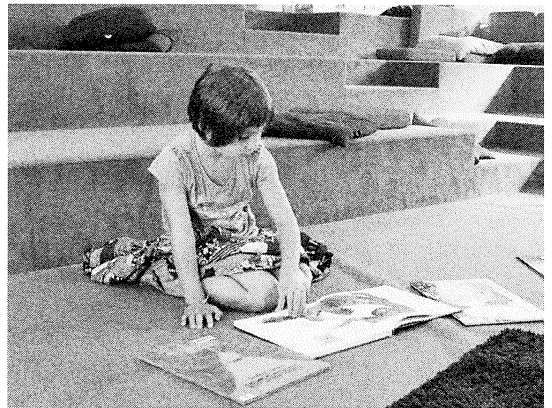
実際、アニメーションが扱う領域は非常に幅広い。読書のみを対象とする限定的な活動として捉える日本のアニメーションの理解とは全く異なり、さらに多種多様なプログラムに支えられた活動をアニメーションは意味しているのである。たとえば2014年現在、パリ市ではアニメーションを実践できる場が約50あり、あらゆる社会的階層、社会的地位、年齢層、人種の個々人にも等しく開かれ、約6万人のパリ市民がダンス、スポーツ、演劇、工芸、音楽、コンピュータなど多岐にわたる活動をアニメーションとして楽しんでいる⁷⁾。もちろん、その中には読書関連のものもあり、それがスペインで発展した「読書へのアニメーション」となり、日本に翻訳本を通じて輸入されたというのが実情なのである。したがって読書活動の場であるならば、その活動の直接的、かつ実践的な推進者である図書館司書が主にアニマトゥールとして図書館の蔵書に生命を与える様々な企画を提案し、これを通じて、子供も含めた図書館の利用者全体に働きかけることにより、実践される場全体をも活気づかせる、そのような読書及び広く文化全般に関わる豊かな活動の総体を、アニメーション (つまり日本で称されるところの「読書へのアニメーション」) は指すのである。したがって読書や読み聞かせに限らず、あらゆる文化的活動を通じて、それに参加する一人一人がわくわくする気持ちを

持って人間の内的な創造性と精神とを主体的に活性化させ、心身を澁刺と豊かにすることが主目的である。その点でも、アニメーションという語自体は、読み聞かせなどによる読書指導や、そのための国語教育といった限定された分野だけに関連するものではないことは明らかと言える。

それでは、たとえばフランスの読書関連のアニメーションはどのように実践されているのだろうか。読み聞かせなどの活動を行っている現場を訪ねた。2014年9月6日（土）午後、パリ東部近郊のベッドタウンで人口10万人を抱えるモントルイユ（Montreuil）市内の市立図書館⁸⁾に足を運んだ。ちょうど2か月間の長い夏休みが終わったばかりで、新学年に入ってすぐの週末ということもあり、館内はさほど混んではいなかった。読み聞かせは、午前10時から正午までの2時間が0歳児から3歳児まで、午後3時からが4歳以上の子どもたち（とその保護者）向け、と対象年齢に応じて一日2回にわけて活動が行われていた。

この日の午後、読み聞かせを担当していたのは、図書館司書でもあるオードレー・ラン格拉斯（Audrey Rainglas）さん（37）で、この回のために予め彼女が選定し、表の看板にも告知されていた竜の絵本を、集まった子供たち向けに声色を使い分け、臨場感たっぷりに、時に絵も見せながら、読み進めていく。その様子をじいっと見つめながら聞き入っている表情は真剣そのものだった。20

分ほどの読み聞かせタイムが終わると、子どもは皆、気に入った絵本を何冊か探しては、自分のそばに置き、付き添いの母親と一緒に、あるいは一人でその場に座り込むなどして、思い思いにストーリーやイラストの世界を楽しんでいる様子だった。読み聞かせに立ち会わせてほしいのは、日本からアニメーションの調査に来たからだと事前に説明すると、ラン格拉斯さんは、なぜ、このような日常茶飯事が調査の対象になるのか、逆に教えてほしいものだと言った。読み聞かせ以外にも、子どもは絵本のキャラクターの塗り絵を楽しんだり、ある曲ができる背景のお話を聞いた後、実際にそのCDを聴いたり、と自分たちの好きな活動を自由を選んで参加している。また、9月が設立40周年の節目となったこの図書館では、市民と





モントルイユ図書館司書 A・ラングラスさん

ともにこれを祝う週末イベントが、立て続けに準備されていた。例を挙げると「戦前のフランス映画上映会」や、講演会、コンサート、展覧会などの企画から実施まで、全てがアニメシオンの担い手たるアニマトゥールとしての彼女たちの仕事であった。このようなアニメシオンは当然、他の図書館でも行われ、かつ、図書館以外でも、様々な趣味活動や屋外スポーツがアニメシオンの対象になっている。このため、ラングラスさんは「これは何ら珍しい活動ではないと思う」と、アニメシオンが人々の間に当たり前のように溶け込んでいる様子についても語ってくれた。司書資格を取得して約15年、この仕事を続けてきた彼女ならではの、肩肘張らないさりげない佇まいの中に、創造的な活動に楽しく関わることを通じて暮らしに文化的な潤いが自然に伴われるアニメシオンの姿勢と、それがもたらす効果とが根付いているのを目の当たりにして感銘を受けた。

3. アニメシオンの実践例②スポーツ

先に述べたブジョルは1980年代末時点でアニマトゥールを3種類に定義づけている⁹⁾。前項の図書館におけるアニメシオンのように個人向けで

はなく、地域住民に対する活動を担当するのは「社会文化アニマトゥール」に該当し、非常に広範な領域をカバーする。それ以外にも、ブジョルは音楽、演劇や舞踊など芸術文化の普及を行う「文化アニマトゥール」、さらに人々を疎外せず、社会に統合できるための活動を主とする「社会アニマトゥール」を提示し、3種の別を明らかにしている。

余暇活動がさらに組織化されていくのに伴い、若者層が自分たちで趣味として楽しむだけでなく、お年寄りの間でもスポーツやダンス、ジョギングなどの身体的表現活動が盛んに行われるようになると、「社会スポーツアニマトゥール (animateur socio-sportif)」が新しく登場した。「社会スポーツ」を冠するこの名称は、明確な定義づけがないまま、実態に引きずられて生み出されたアニマトゥールの新たなカテゴリーであった。なぜなら、たとえば、競技人口も連盟への登録者数ですぐに把握できる競技スポーツとは異なり、この「社会スポーツ」というカテゴリーは、それ自体が「社会文化」と「スポーツ」との中間に位置し、それぞれの領域の機能を少しずつ併せ持ちながらも、そのどこまでを実際に指すのかに関しては依然として曖昧なまま、という状況を物語る存在に留まっていた。

名称の不明確さが、まさに実態の混迷を象徴しているかの如く、この迷いは、フランスでスポーツを統括する役所がコロコロと再編と分離を繰り返し、名称もその時々で変わってきた歴史を鑑みても、推し量れるのではあるまいか。近代オリンピックの生みの親であるフランスで、先ず競技者の実力を上げ、さらには、その裾野を広げることを目的にスポーツ行政が意識されるようになったのは、文化行政が立ち上がって間もない同じ1960年代であった。きっかけは、1960年ローマオリンピックにおけるフランス代表の惨敗で、これ以降、スポーツ行政の強化が叫ばれるようになり、1966年、青少年・スポーツ省 (Ministère de la Jeunesse et des Sports) が初めて設置された。

以後、この役所は、時に国民教育省や、厚生省の下に置かれたり、単独で設置されたり、とめまぐるしく変遷した。スポーツが国民教育省に統合された1980年代とは、アニメーションの実施を管轄する地方自治体にとって、影響力が相対的に弱まる時代を意味した。ところが、国民教育省の内部ではスポーツの占める割合が非常に小さく、また、1982年、折からの社会党ミッテラン政権下で始まった地方分権の流れにも沿って、地域は再びアニメーションを通じた地元市民のためのスポーツを次第に自らの統轄下に取り戻すことができたのである¹⁰⁾。

こうした社会におけるスポーツの位置付けの変化と省庁間の綱引きとがそのままにじみ出るかのような試行錯誤を超え、世界的にスポーツが重視される21世紀に入ると、2002年にはスポーツ省として独立して創設された。その後もさらなる改変を経て、2010年からは再びスポーツ単独でスポーツ省が置かれている。アニメトゥールに関しても、スポーツを専門に担当するスポーツアニメトゥールが誕生した。

アニメーションの場合、青少年や市民団体活動に関係した施策を実施するため、スポーツ省の中でも、「青少年・民衆教育・非営利社団活動担当部局」との連携が欠かせない。ともすれば、オリンピック種目のような競技スポーツとその活動を支える団体を中心に進められてきたスポーツ政策が、もっと幅広い国民の余暇や健康のためのスポーツ活動についても取り組まれるようになり、その積極的推進のために、どのように対応していけるかが課題となった。ヨーロッパのスポーツというと、サッカーに代表されるスポーツ・クラブ制（日本のJリーグのお手本にもなった）を想起しがちであるが、こと、非営利のアニメーションの活動に関しては同じスポーツでも、これまで述べてきたように、国、いや、むしろ地方自治体などの公共機関が大きな役割を担っている点に特色が認められる。それゆえ、官僚主導による地域スポーツの組

織化ムーブメントが先に大枠として存在し、それが民間クラブでアニメトゥールともども委託・実施されるという状況が存しているのは当然のことと言える。つまり、スポーツ・クラブはアニメーションの活動にも利用されているのである。

したがってスポーツに関するアニメトゥールも、実施されるスポーツの種類やレベルに応じて、時には専門職として、様々な国家資格が求められることとなる。これがなければ、有償の指導はもちろん、活動の実施もできないからである。

2. で述べたBAFA (Brevet d'Aptitude aux Fonctions d'Animateur) は、毎年、約5万人が取得するアニメトゥールとしての適性免許であり、スポーツに特化したものではない。しかし、これだけあれば活動できるスポーツの分野もある、なぜならスポーツには、社会スポーツアニメトゥールの関わる領域も存在するからだ。たとえば、夏休み中の子供を集めて1日、ないしは数日から数週間という単位で行われる林間または臨海学校のことを「コロニー」(colonies de vacances) というが、子供たちを受け入れるこのような林間または臨海学校施設で、集団生活の一環としてスポーツを楽しむさせるアニメトゥールに求められるのはBAFAである。チームの運営や試合の実施以外に、スポーツ施設の利用に付随して発生する予算管理などの業務も行う一方、子供たちに対してはスポーツの基本を指導し、安全に気を付け、勝負から学ぶスポーツ精神も身につけさせる。しかし、コロニーの最大の目的は、家族や学校から離れ、集団生活を通じて子どもたちに人間の自立に必要な物事を体得させることにある。子供は、そのような体験を通じて協調性、社会性、自立心を身につけ、いつかは民主主義に資することのできる立派な市民になることが求められているのである。また、特定の専門的なスポーツ指導を行うためには、さらにこれとは別の資格免許が必要である。1986年に始まった民衆教育技術アニメトゥール国家免許 (BEATEP=Brevet d'Etat d'Animateur Technique

de l'Education Populaire) は、科学・技術、文化・表現、社会活動・地域生活の3分野における技術的能力や教育的知識を持つアニマトゥールに付与されていたが、これが2001年以降、より専門的な資格として、青少年・民衆教育・スポーツ職業免許(BPJEPS)(Brevet Professionnel de la Jeunesse, de l'Éducation Populaire et du Sport)に切り替わっている。スポーツを通じた教育よりも、専門的スポーツ指導という、職業としての側面を重視するようになったための移行措置である。

経済発展を遂げた社会で、民主主義的理念にのっとり、文化的活動としてのアニメーションの体制が整ってくると、その推進を現場で行うアニマトゥールの役割は今後、ますます重要になってくるだろう。アニマトゥールは、日本でいうと「指導員」や「インストラクター」に近いが、もっと幅広く社会や教育とも関わりながら文化の活性化と個人としての自立を促す存在といえる。文化活動を通じて人々の主体的な自己実現を支えるという点では、一人一人の人生のアニメーションを助ける役割をも担っているのかもしれない。

4. アニメーションに係る課題

本来、文化とはお上から大衆への啓蒙によって普及させていくものではないはずである。文化なのであるから、個々人が自由に享受し、創造を通じて主体的に志を高め、自己実現を追求する方向で根付いていくべきものであるし、また、そうあってこそ、フランスの主張する共和制民主主義の精神にもつながるのではないか。このようなフランス的エスプリを文化面から証するものとして、1998年、文化・通信省¹¹⁾がC・トロトマン(Catherine Trautmann)文化大臣の下に定めた『舞台芸術に向けた公共サービスの使命に関する憲章(Charte des missions de service public pour le spectacle vivant, 1998)』の1節においても、「芸術と文化の

ために国が行う主体的な取り組みとは、第一に民主主義の概念とその要求によって生じるものである」と規定されている¹²⁾。その一方で、アニメーションでも認められるように国や地方自治体が積極的に文化に関わっていくことを「文化への公的関与(intervention publique à la culture)」と呼び、その賛否を問う議論も続いている。

本論は、日本ではなかなか理解されにくいフランスのアニメーションについて、どのような歴史的背景とコンセプトを持って生まれ、実際にどのように行われているのかについて、ほんの一例を見たに過ぎない。しかし、少なくとも、アニメーションの本質が文化的な創造活動による個人の精神の活性化にあることから考えても、「読書への」と冠したアニメーションも、子どもも含めた社会全体の個々人により、もっと楽しまれる存在として捉えるべきであるとする視点を提示したと考えている。図書館にやって来るのは、なにも子どもだけではない。よって、大人も、子どもも、ともに、或いは、時には別々に図書館において楽しめるプログラムなら「読書へのアニメーション」に入ることになる。もちろん、将来の活字好きを育てるためにも、子ども向けのアプローチ自体が非常に重要なものであることは言うまでもない。しかし、これを少なくとも、「読書指導法」、「子供たち」と限定的な説明表現の中に押し込んでしまうと、それが本来持っている活力(アニメーション)自体が削がれてしまうことにつながらないか、という一抹の懸念を抱かないわけでもない。それは2)で前述のラングラスさんが言った「これは何ら珍しい活動ではないと思う」という一言に象徴されるように、余り特別視せず、本好きの大人がいろいろなことを気軽に試してみる中から、自然に生まれてくるものではなかろうか。少なくとも、このような視点があってこそ、「読書へのアニメーション」も、かくも多様なアニメーションの一つに位置づけられると考えられる。また、そうやってこそ、「読書へのアニメーション」と称される読書関

連活動は、初めてその名の通り、生き生きとした活力と輝きを以て、市民の暮らしと社会の希望の一端を照らし出してくれることになろう。このように私は信じている。

(本研究は平成24年度学園研究費助成金 (B) の助成による成果である。)

注

- 1) 足立幸子, スペインの読書運動「読書へのアニメーション」全国大学国語教育学会発表要旨集 98, pp. 10-13, 2000、笹川年子「アニメーションにおける読みと交流」全国大学国語教育学会発表要旨集 114, pp. 123-126, 2008など
- 2) Sarto María Montserrat, La animación a la lectura; Para hacer al niño lector. Ediciones SM, 1984. M・サルト, 佐藤美智代・青柳啓子訳 (1997)『読書で遊ぼうアニメーション一本が大好きになる25のゲーム 単行本』, 柏書房, 1997
- 3) 2000年ごろからは、一般紙でもアニメーションに関する記事掲載が見られるようになった。たとえば、「読書ゲームは、スペインで生まれ『読書のアニメーション』と呼ばれる。」(「ゲーム感覚で読書、活字離れの中、授業で試み」日本経済新聞2000年6月16日付夕刊, 6面)や、「ゲーム感覚で楽しく読解力や表現力を養うスペイン生まれの読書指導法『アニメーション』……」(「子どもたち大活躍 読書優秀実践で大臣表彰 稲沢の領内小」中日新聞2007年5月8日付朝刊尾張版, 18面)など。
- 4) 法定有給休暇 (congés payés) の期間は、戦後復興を果たしつつある1969年に年4週間、1982年社会党ミッテラン政権下で年5週間に増加改正され、現在に至る。
- 5) Ministère des Affaires culturelles (1959-1974)、その後、文化・環境省、文化庁、文化省などに名称が変わり、1997年から現行の文化・通信省。
- 6) ジュヌヴィエーヴ・ブジョル: 著, ジャン＝マリー・ミニヨン: 著, 岩橋恵子: 監訳『アニメトゥール フランスの社会教育・生涯学習の担い手たち (Guide de l'animateur socio-culturel)』, 明石書店, 2007, p. 20
- 7) http://www.paris.fr/pratique/pratiquer-un-sport/centres-d-animation/les-centres-d-animation-parisiens/rub_8642_stand_54310_port_20455
パリ市役所ホームページ2014年8月22日付各種アニメーション紹介記事 (最終閲覧日2014年12月19日)
- 8) La Bibliothèque Robert-Desnos
- 9) 前掲書『アニメトゥール フランスの社会教育・生涯学習の担い手たち』p. 18
- 10) 地方分権化法制定以前から、スポーツに関しては、施設政策を重点的に実施する地域を国と地方自治体とが協議して決め、それに沿って特別予算が組まれ、支給される体制が、整われつつあった。
- 11) マルローが初代大臣を務めた時代から既に何度も名称が変わり、現在はMinistère de la Culture et de la Commu-

nication 注5参照。

- 12) L'engagement de l'État en faveur de l'art et de la culture relève d'abord d'une conception et d'une exigence de la démocratie. 文化・通信省官報110号 (Bulletin Officiel Numéro 110 par le Ministère de la culture et de la communication)、1999年3月発行、p. 12

わきた・やすこ / 文化情報学部准教授
E-mail : wakita@sugiyama-u.ac.jp